

第2回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議 会議概要（無記名版）

日 時：平成 29 年 9 月 5 日（火） 10 時 00 分～12 時 00 分

場 所：伊予市役所 4 階会議室

出席者：アドバイザー会議委員 7 名、事務局 6 名、委託業者 1 名

配布資料：資料① 第 2 回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議議事次第

資料② 第 2 回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議資料

資料②（別紙）平成 30 年度からの事業展開

資料③ 平成 29 年度複合施設建設に伴うアウトリーチ事業 実施計画書

資料④ 伊予市の魅力・保存継承「ボランティア育成講座」（案）

1. 開会

- ・ 開会の言葉

2. 委員長あいさつ

- ・ 前回にも少しお話したが、来年度の助成金、補助金を申請する時期がきている。早めに助成金、補助金を獲得して、運営の助けにしたいと思っているので本日は事業内容についてご意見をいただきたい。（委員長）

3. 委員自己紹介

- ・ 今回より出席の委員 3 より自己紹介があった。

4. 議事

(1)伊予市図書館・文化ホール等管理運営実施計画における事業方針

- ・ 事業の方針について事務局から以下の説明をおこなった。（資料②）
- ・ 前回の確認もかねてお話したい。まず、伊予市の総合計画では「まち、ひと ともに 育ち輝く伊予市」という将来像を掲げている。それをもって、管理運営実施計画の位置付けとして「学び はぐくみ つながる 出会いの広場」という施設の基本理念を策定した。この将来像や基本理念を実現させるために事業をしていくということをご確認いただきたい。
- ・ 事業方針については、1）から 5）までである。1）まちの個性となる「伊予市らしさ」の再発見と創造、2）中長期の視点を持った多様な事業の提供、3）地域の課題解決に寄与する事業・運営、4）市民が集う場となるための市民参加の推進、5）伊予市全域を対象にした事業展開と中心市街地の活性化。この 5 つの事業方針に沿って、事業展開したいと考えている。
- ・ 資料②の P.3 下の欄は市民参画の方針を示している。市民の皆さんの参画をもって参

画協働という形で進めていきたい。1) 市民の学びや経験・能力が発揮できる活躍の場、気軽に集え安心できる居場所づくりのために、出会いと交流、コミュニティの形成をめざす。2) 市民の需要や段階に合わせた市民参加の機会を提供し、自主的で幅広い市民参加を通じて、施設の事業や運営に主体的に関わるボランティアやサポーターを育成する。3) 「伊予市らしさ」の再発見と創造のために、積極的な情報発信・交流を行い、施設と地域を結び付けるネットワークをつくる。4) 市民や団体・事業者等の新しいつながりを築き、市民や団体、事業者、行政などがそれぞれの責任と役割を明確にした協力関係、協働体制をつくる。以上の方針で進めていきたい。

- ・ 事業として重点的に行っていくものとしては、普及育成と保存継承を考えている。普及育成では、アウトリーチ事業、出前事業や、子どもや若い世代を中心としたワークショップ、ボランティア、サポーターの養成講座といったもの。保存継承の部分では、地域の文化資源、伝統芸能の保存や人材発掘、芸能発表、昔の写真展示や映像公開等による情報発信、地域の名人、達人による後継者育成講座という内容で考えている。いわゆる人材育成や、伊予市の魅力の地域資源の発見、情報発信という部分において、重点的に実施していきたい。(事務局)
- 一般的に文化ホールのような施設の場合には、鑑賞事業を優先する施設がほとんどになっている。有名な歌手が来て、それを皆で聞きに行くというようなことが中心になることが多く、この近隣でもそのような事業が多い。市民の皆さんからの意見で本当に多かったこととして、当施設ではまず人を育てるということと、この地域にある伝統芸能などの文化資源や文化資産、地域資源など地域を大切にした施設にしようということで、普及育成と保存継承の二つに特に重点を置いて行うということになった。他のことをしないということではないが、限られた予算の中で、まずこのことだけはきちんとしてしようということで、力点を置いているということを理解して頂ければと思う。(委員長)

(2)平成 30 年度からの事業展開に係る検討

- ・ 平成 30 年度からの事業展開に係る検討事業の方針について事務局から以下の説明をおこなった。(資料② (別紙))
- ・ 資料② (別紙) の A3 の表をご覧ください。事業案を目的別に A、B、C、D ということで掲載している。A については、伊予市らしさ創出を目的にしている。その中でも種類としては2つあり、まず、保存継承については、プレイベント時点においては人材育成、伊予市の魅力発見、調査、情報発信というようにところに視点を置いている。伊予市の歴史収集、人「財」ということで、財宝の財になっているが、人は宝だと考え、人「財」についても情報を集めていきたい。文化資源、伝統芸能の収集、施設が建つのは町中だが、中山、双海地域でも施設が建つことをきっかけに、地域資源を見直し把握していきたいと考えている。開館記念事業、通年事業は、それからの発展ということで、情報の提示、アーカイブ化、記憶や、後継者をどう育成していくというようにところに視点を置いている。手順としては、記録したものをどう情報発信していくか、またそれをどう活用していくかというところを、順番に実施していけたらと思っている。活用という部分においては、もう一種類の「交流」の項目「伊予市らしさの発展」というところで、集めた情報を使った旧伊予市、中山、双海の連協事業や、その連携事業を展開させていくということを検討している。市民ミュージカルという規模のものを急に実施するのは難しいかもしれないが、連携の中で生まれてくる創造事業への取り組みを行っていきたい。この施設が、情報を保存する場所、収集する場所、情報発信基地ということで、市民の一助になればよいと思う。また、このような事業を展開することによって、市民が自分の地域やふるさとを振り返るきっかけになれば良い。B については、次世代の参加ということで、市民参画という部分がとても大きくなると思うが、普及育成、子どもたちの参加、また学校との連携を考えている。プレイベント時点においては、この施設が行うことに関して興味を持ってもらうという目的で、仮囲いペイントとしている。これについては、建設予定地の囲いの塀に絵を描いていくイベントで、様々な自治体が行っているが、伊予市に関しては建設側との協議がまた必要になってくる。子どもたちに興味を持ってもらうということを目的にしている。そして工事現場等を含め、施設見学をしてもらうということ。市民からは、スタンプラリーなどでゲーム性を持たせて、施設に興味を持ってもらうのはどうだろうかという意見も出ている。そしてアウトリーチ事業、出前事業は後ほど詳しくお話をしたいが、こちらから出向いていって市民と共に周知活動をするということを検討している。また、B のもう一つの目的としては、多くの市民の参加ということがある。子どもからお年寄りまで、一人一人に参画していただきたいと思っている。できれば、子どもを核にした参画が成り立てば良いと思い描いている。その中で、リーダー、人材育成や発達などを考えていきたい。プレイベントから、市民の実行委員会、組織の立ち上げや活動支援や強化、あとは施設を使いこなす、まちを活性

化する、元気にするための講座、サポーター育成講座や、企画、技術系の育成講座、研修プログラムなどをしていきたい。C は、複合施設を生かした事業展開を考えている。市民大学のイメージとして、先ほど保存継承のほうで地域の名人、達人、後継者育成講座ということ話をしたが、市内にはいろいろな技を持っている方がいるので、そのような方々に教えてもらう場をつくっていきたい。また、その達人同士や名人同士がお互いに教え合うような取り組みが展開されたら良いと考えている。まずはこの施設の核として、さらにはこの施設を核としながら市内のいたる所でそのような取り組みが展開されたら良いと考えている。プレイベントで市民大学の準備をしながら、開館記念事業には開催という形に持っていきたい。複合施設であるため、図書館、文化ホール、地域交流という施設規模をそれぞれ生かした事業の展開や、各分野の方々、団体、地区等が連携した形に持っていければ良いと考えている。D は、施設の情報提供について。情報発信は非常に重要だと思っているが、行政が主導で行うのは市報やホームページが多い。それに対して市民の皆さんの協働で、インターネットなど情報発信が広く使えるツールを活用しながら行っていきたい。その際、情報モラルに注意し、きちんと研修を行いながら市民に関わってもらいたいと思っている。市民一人一人が伊予市のファンになり宣伝隊という形で、一人一人もしくはキャラバン隊というようなグループを組んで、市と協働で施設の取り組みの情報発信や、伊予市の魅力の情報発信をしていきたい。他市事例は、委託業者から説明をお願いしたい。(事務局)

- 他市事例の補足ということで、一つ目の伊予市らしさ創出に対して挙げている事例は、一つ目が八戸のはっちという施設がある。この施設もシアターと美術館、図書センターの複合施設になっている。オープニングの際に、八戸市民をアーティストが撮影したものを写真展示した。市民が作品になって新しい施設に展示されるという取り組みである。興味を持ってもらう、それから身近な人をあらためて見つめ直すというところで、この企画がされている。それから右側の広島三次市民ホールの事例は、伝統芸能フェスティバルである。伝統芸能というのは、それぞれ流派があるので日頃集まりにくいものなので、この新しい施設ができたことを機に、その垣根を越えて皆でフェスティバルをしようではないかということで、地区のまとまりができた。一つの壁を越えて、新しいものを作り上げたというイベントの例だ。

それからBの次世代の参加、多くの市民の参加に対しては、釜石市民ホール、大船度リアスホールの事例がある。仮囲いペイントは先ほど事務局からも説明があったとおり、様々な自治体で行っている。工事中ずっと真っ白な壁になっている建築壁を活かして、子どもたちに絵を描いてもらったり、デザインを決めて皆で作ったりというようなことをして、施設ができる前から、その場所に何かができるわくわく感や、自分がそこに参加したという記念をつくってもらうようなイベントである。そしてリアスホール・アドベンチャーは新しい施設ができたときに、新しい施設を全部探検してみ

ようというコンセプトのイベントであった。子どもたちに施設に来てもらい、わくわくするような体験を施設の中でしてもらうという目的の事例である。それから3番目が、複合施設を生かした事業展開。主に読み聞かせと、映像のコラボレーションを挙げている。アクトシティ浜松と大船度リアスホールの事例をご紹介したい。アクトシティでは、映像を見せながらお話を読んで、音楽を聞かせるというような、小さい子のためのコンサートが行われている。大船渡の場合は、ホール内ではなくホワイエ部分にはみ出して演奏をしながら朗読する、朗読発表会と映像という形になっている。施設全体に音が漏れ聞こえるような、全館にしみ出したイベントの例である。最後に、施設の情報提供について。長野市美術館と埼玉県蓮田市総合文化会館ハストピアの事例を挙げた。この長野市の事例は、長野市美術館サポーターズ倶楽部という市民組織が行ったイベントであり、Facebookを活用した事例を提示している。人がパネルを持っている写真だが、この中には市長や関わった市民が、「開館まであと何日」というカウントダウンパネルを持っている。その中にも知り合いを見つけたり、自分の活動している団体がいたりすると、自分たちが関わっていくわくわく感、自分たちがこの施設をサポートしていくという気持ちになっていけるような取り組みだった。それから右側が工事現場見学会ということで、これも様々な自治体で行われている。まだホールの形ではない、完全に建築中の建物の中に入って、この辺りがホールになるというようなイメージをしてもらう内容になる。これも建物ができる前からわくわく感や、自分たちのホールだという思いを持ってもらいたいという意味のイベントである。どの自治体もそれぞれの思いがあつてのものなので、伊予市は伊予市らしいものをこれから作り上げていくということになるかと思うが、一つの参考として事例をご紹介させていただいた。(委託業者)

- 補足すると、この表自体が、開館記念事業、通年事業まで含めた表になっている。まだこの部分に関してはそれほど十分に検討したわけではないので、今のところ市民ワークショップで出てきた意見および、現実的に取り組めそうなものを挙げて整理をしたと理解していただきたい。二つ目には、先ほど事務局や委託業者からの話の中にもあったことなのだが、一般的に文化施設というのは、文化ホールにしても図書館にしても、その施設の中で行うことを検討してきた。恐らくここ10年程度だと思うが、施設の中に留まらず地域の文化資源を発掘して地域に広げ、新たなものを作っていくセンターになるということが目的になってきている。文化施設の中では行っていないが、例えば文化施設と学校が協働したイベントを今後も行っていくというのが一つの大きな流れになっている。20年ほど前から使われるようになったアウトリーチ事業という考え方は、施設から外に手を伸ばしていくというものである。三つ目は、他市事例でも出ていたが、地域同士の交流、それから各地域で違う組織に属している人たちがここを利用するということがある。言い換えると、地域の知恵の交流がここで行われるということ。例えば、新しくできる文化施設の中で行っていることと学校の文化祭が

うまく連携できることがあれば良いと思う。それは図書館でも同じで、地域で行われている活動と図書館が連携するということで既存の活動も継続していく。伝統芸能を継承しようとしているが継承者がいなくて孤立している人たちがいる。それが交流の知恵の中から継承者を探し出せるような、良い形で継承ができると良いというのが三つ目の目的になる。時系列の問題がまず前提としてあるということと、施設が地域にアウトリーチしていくということ、そして地域の知恵の連携ということが、この施設で行われる取り組みの大きな流れになる。この後、直近の平成 30 年度の補助金等の話が出てくると思うが、それに至る前に、やみくもに補助金を取ってそれに向けた事業をするというわけではないので、前提として考えていることをご説明した。(委員長)

- 時系列ということ言えば、このプレイベントの時期は、一番重要視しないといけないのはやはり周知と、その周知をする過程で、市民の人たちにどれだけ参加してもらうかというようなことなのではないかと思う。(副委員長)
- ありがとうございます。確かに、周知は重要になる。(委員長)
- アウトリーチ事業の中で読み聞かせなどのお話もあったので、図書館に限って言うと、広報はし過ぎることはない。いくらでも広報していかないと知られない存在だと思うので、図書館に来たらこれほど良いことが待っているというような広報をしていけたらと思う。図書館事業の中でもインパクトのある、先ほどのアクトシティ浜松の例にあるような朗読や読み聞かせに、映像や音楽というものを組み合わせたものは有効ではないかと思う。そこに地元の活動者が参加できれば良い。伊予市はたくさんの読み聞かせグループもある、公民館を使って音楽をしている方も多くいる、地域のそのような方が活躍できればと感じた。(委員 1)
- ありがとうございます。選書についてのご意見などはいかがでしょうか。(委員長)
- 私も県立図書館なので経験がない。学校や大学などでブックハンティングはよく行われているが、市民のブックハンティングというのは、どのような縛りをもって行うのかなど、疑問がある。(委員 1)
- ブックハンティングというのは実際の選書ではなく、子どもたちが書店へ行って、この本が図書館にあると良いというリストを作るというような内容である。(委員長)
- 東雲大学で実施していた記憶がある。(委員 1)
- この選書への市民参加は、具体的に事務局が詳しいと思うが、前提として、今の図書館に対して蔵書が増えるということか。(委員長)
- 蔵書は増やす予定である。何千冊という本を足すようになるのでその全てに対して市民参加を行うのは難しいが、絵本なら絵本に絞って、そのような関係の保護者の方や、保育所、幼稚園の先生に呼び掛けをして、絵本の選書をしようと思っている。その際に書店などに声掛けをして本を持ってきてもらい、そこに市民を呼んで一緒に選書をしてリスト化することを検討している。重複しているものもあると思うし、事務局と

して選べないものもあるので、あくまでリスト化までの活動になる。そのリストをもとに選書していくということを考えている。その前段として、いきなり市民の皆さんにというのも難しいので、小中学校などに呼び掛けをして、学校の先生たちと選書をしていくのも一つの手ではないかと思っている。今、その本の業者と話をしながら、どのような形が良いのかという手法を詰めているところだ。(事務局)

- 他市でも事例はあるのか。(委員長)
- 絵本の大手の業者に来てもらって、何百冊もの本を体育館に並べて子どもたちが選んだ事例がある。子どもたちが選ぶ前に、本屋や読書ボランティアのかたがたが読み聞かせをして、このような本がお勧めだと PR してから子どもたちに選んでもらう手法である。1 年生から 6 年生までがそれぞれ絵本を選んでいってリスト化し、そこから学校の先生方が選んでいく。子どもたちが参画をしたという喜びや、自分の本が入ったという思い出にもなる。対象としては幼児よりも、やはり小学校以上が良い。(事務局)
- 基礎知識として補足すると、図書館流通センター、TRC という会社があり、図書館の指定管理も受けている。(委員長)
- 選書の前段では図書館流通センターで一度ふるいにかけている。お勧めの本もあるので、そこが持っている本であれば、そこまでおかしい本は無いのではと思う。(委員 1)
- 学校の話も出てきたところで、図書に限らずに一言ずつお願いしたい。(委員長)
- 小学校だが、先日事務局からアウトリーチ事業の説明を受け、各学校で希望する日時等を検討してほしいということだった。本校も昨日帰ってから職員と話をしたのだが、特に小学生の場合は、このような図書館、文化ホールを利用する際に、やはり保護者を巻き込むことが大事だと思う。例えば、郡中校区だと子ども同士で気軽にこの図書館、文化ホールに行ける。しかしそれ以外の少し遠い学校になると利用する際に保護者の送迎や同行が必要なので、やはり保護者も巻き込んだ啓発事業が必要ではないかということだった。本校の話になるのだが、このアウトリーチ事業を行うときに、参観日のような、保護者や地域の方が集まる行事のときに合わせてこの啓発活動を行えば、広く保護者や地域住民の方にも知ってもらえる機会になるのではないかと思う。そのような機会を来年度持ちたいと思い、現在アウトリーチ事業についての検討を進めている段階だ。(委員 5)
- 図書館だけではなく、いずれは文化ホールの事業も保護者を巻き込むのが大切だということか。(委員長)
- その通りである。やはり本校も図書館、文化ホールまでは遠いので、子どもだけでの利用はできない。保護者にとっても魅力ある図書館、文化ホールということで、子どもを連れて行ってみよう、子どもが行きたがっているので行ってみようという機会づくりが大切だと感じる。親子への啓発が、利用に対して大事になってくるのではないかという考えを持っている。(委員 5)
- 我々に欠けがちになる視点だと思う。目の前の方のことばかり考えるので、なるほど

とを感じる。(委員長)

- 委員 5 からあったように、本校も昨日聞いたアウトリーチ事業についての話をした。やはりいかに効率良く知ってもらおうかということを考えると、生徒たちだけよりは、一同に保護者や地域の人に来てもらえるものに沿ったほうが良いのではないかと考えている。来年度になるが、できれば文化祭などにその一コマが持てるような計画をしたいと思っている。プレイベントとして実際に良いものがあるということを知周するのであれば、人が多く集まる場で効果が上がるもの、学校としても人が集まる所というのを考えていかなければいけないだろうと思う。本校は三世代の方が多いので、その年代に周知がしやすいだろうと思っている。学校として協力できることはしていければと思う。私自身イメージがなかなか持ちにくかったのは、市民大学だ。講座をもってという形になるのだとするならば、例えば生涯学習センターのような所でも行っているのでは、どれだけ差別化ができるかということがある。例えば人材の収集などに関わりが多く出てくるのではないかなと思う。プレイベントまでの準備がとても大変なのではないだろうか。そして以降通年事業としてずっと行っていく上でも、大変なことになるのではないかなと思いながら聞いていた。解決法の提示ではないのだが、この市民大学というのがこれからの 1 年間の中で最も大変なのではないかなと感じた。(委員 4)
- 市民大学に対して、事務局から補足はあるか。(委員長)
- 市民大学は、委員 4 の仰る通りと感じる。愛媛県の中では、いよこころザシ大学で先述のような技術を持っている方が先生になって展開をしている。本当にうまく展開をしているところだが、実施までにおそらく内部では大変な調整があると思っている。港南中学校で、地域で頑張っている方々を呼び、総合学習でお話をしてもらう場を設けたことがある。アウトリーチの一環になるかもしれないが、そのような場をもし学校のほうで持って頂けるようなことがあれば、グループや個人の方に声掛けをして、学校側に負担のない形で出向いていきたいと思う。また、できたらそのような人たちの人材バンク、情報がある程度集めた上で発信をして、子どもたちだけではなく、いろいろな人たちの学びの場にしたいと思っている。これについては検討の余地がまだまだあると考えている。(事務局)
- 偉い人を他の地域から呼んでくるというイメージではなく、地域の中での学び合いというイメージか。(委員長)
- その通りである。図書館では特殊な技術を持っている方に限定するわけではなく地域でちょっとした知識や知恵をお持ちの方にもお声掛けしていこうと、読書ボランティアの方々との話し合いをしている。(事務局)
- 言うのは簡単だが行うのは大変だという話で、恐らくここに挙がっている項目は全て、市民から、このようなことをしてほしいという意見をもらったことでもある。一度に全部はなかなか実現できないかもしれないが、委員 4 からのご意見のように、少しずつ

つ行えることを事務局と一緒に考えていければと思う。(委員長)

- 頭の中をいろいろ整理するのに時間がかかったのだが、聞いていて感じたことは、キーワードの中にある伊予市らしさというところが、やはり本当に大事だという感じている。もう一つは、この伊予市らしさの中に中山地区と双海地区を巻き込むということである。次の資料にもあるが、やはり建物は郡中地区にあるわけだが、そこに集めるのか、あるいはそこから発信するのかという、受け入れる側とアウトプットとを上手にしないといけない。そのような意味では、歴史の収集、人材収集という案が出ている。これは委員2からもあったように、郡中200年祭の議論の際にもいろいろ出てきた地域の宝を、しっかりと集めるということが極めて大事だ。郡中200年祭の場合は狭い範囲だったが、これを伊予市全体に広げていくとなると、実働部隊として核になるリーダーがやはり必要ではないかと私は思う。それには各地域にいる、それぞれの地域をこよなく愛し、これからのことを真剣に考えている方々を巻き込むことが、前を向いて進める一つの力になるのではないと思う。後継者育成という意味からも、小中高校生などの若者、これからの世代にその種を植えていくという事業をしっかりと実施していかないといけないというイメージを持った。地域の匠や達人という方々はこれから減っていくので、今発掘し、子どもたちの前に立つてもらうことが極めて大事だと思う。そのような意味では、複合施設としての役割というのは、集めることと出すことを基本に考えていく必要があると感じた。(委員3)
- このキーワードは、事業を実施する根拠になる。この施設でなぜこのようなことをしているのかを説明するときに、例えば管理運営計画をその根拠とし、その基になっている伊予市の中期計画、長期計画がある。各計画の中にある言葉をできるだけ使いながら、これはきちんと伊予市のためにしているということを説明する中で、一番大きなキーワードが「伊予市らしさ」という言葉だ。それをどう捉えるかということに関しては議論があり、管理運営計画の検討委員会の中でも「伊予市らしさ」とは何かと言われた。これから考えることも含め、今までであった「伊予市らしさ」だけではなく今後未来に向けて作っていかなくてはならない。様々なやりとりがありながら、やはり必要だという議論を得たキーワードでもある。昨日、伊予農業高校の伊予市出身者は4分の1程度でしたという訂正のお電話を教頭先生より頂いた。伊予郡を合わせると半分という内容で今日の委員会の前に訂正しておきたいということでお電話を頂き、本当にありがたかった。小学校、中学校は地元の方たちが原則に来るが、伊予農業高校は、伊予市外から来ているということがあるので、ここに住んでいない学生たちの気持ちが一番よく分かっている先生の発言ではないかと思った。(委員長)
- 今の話を聞いていて、やはり「伊予市らしさ」というものをどう実感するのかと考える。おそらく市民の人たちが、やはり伊予市だと思うかどうか。やはり郡中だ、やはり中山だ、やはり佐礼谷だ、あるいは、やはり双海だと思えるような実感できるものが、見える化されるかどうかということもあると思う。それらを総称してやはり伊予

市だというものになっていくかどうかというのは、これからの活動ではないか。そのようなものをうまく生み出せるような仕掛けが要るのではないかと思う。今回のアウトリーチやこれからの事業について考えたときに、地縁型とテーマ型というものを作って考えたい。地縁はやはり地域を根差したところがあると思う。地縁で言うと、特に歴史に残っているものと、今そこにあるものと、将来に向けてつくっていくかなければいけないものがある。テーマ型にいくと、テーマは基本的には今あるものやこれからつくっていくものをどうしていくのかという話になったときに、先ほどの地縁を生かしながらテーマを作っていくというようなことができれば良いと思う。まだ具体的なイメージはできていないが、この施設ではその地縁型とテーマ型がうまく交流する、受け身から能動的な動きに変わっていくようなきっかけをつくっていくことが大事ではないか。そのような取り組みを重ねていくこと、そして一個一個ここに書いてあることはすごく良いことなので実施していくのが良いと思うが、例えば先ほどの選書にしても、大人が行うものから子どもが行うものもある。しかし、結果の評価が降りてこない、子どもたちの記憶に残らないと思う。記憶遺産のようなものがあって、それが将来的に伊予市で暮らして良かった、関わって良かったと思えるものによって変わるのではないかと思う。そのような記憶遺産、記憶に残るような体験をさらに評価して、個人に跳ね返ってくるような動きが生まれてくると良いのではないか。例えば選書した結果、良い本というのは誰が選ぶかという、少なくともたくさんの人が読んだのだというようなことを、半年後や1年後に検証制度として実施し、あなたが選んでくれた本はこれほど皆さんに共感を呼びました、支持されましたというようなことを評価として返す。これが重なっていくと、地域に対する愛着や絵本に対する愛着が増してくると思う。そのようなものを、うまくいろいろなイベントに重ねていくようなことができれば良いのではないか。抽象的で恐縮だが、いろいろ行おうとすることに対して地縁型の話とテーマ型の話で、地縁型の方は地域の生活者の人たちが主な担い手で、テーマ型は例えばNPOやボランティアの人たちが担い手になる。そこで、地縁型で足りない知恵を、テーマ型の人たちが提供できるということだ。絵本なども図書館流通センターの知恵、あるいは松山で言うとコッコサンという絵本専門店などの人たちの知恵、あるいは県立図書館の知恵を借りたりしながら、子どもたちにとって良い絵本や、あるいは読み聞かせはどうするのかというようなことを協議し、子どもたちの記憶に残っていくような取り組みが重ねられたら良いのではないかと思う。そのときの地縁のイメージが、伊予市という漠然としたものだとなかなかイメージしにくい。そうすると、自分の生活の圏域、実感している圏域がやはり基本になるのではないかと思う。合併して一つの伊予市をつくらうとしているのに、そのような細かな話をして良いのかというのはあるのだが、最後に伊予市というものにつながっていくようなことができれば良いのではないかと思った。(委員2)

→ テーマというのは外からの理屈も含めたもので、地縁というのは市民が実感として持

っている感覚的なものや、生活していく中で出てくるものや、伝統芸能の継承者がいないというような生々しい話というようなことだと思う。伊予市は合併したのでより広がって薄まっているのではないかということと、一方では、その中で人が暮らしていて、いろいろな違う考え方が交流をするという場が必要だということと、おそらくずっとこの施設の基本計画のときから考えていた2つのことが言われている。各委員の話の中でもあったが、違う人たち、異文化が、伊予市の中でもあるのだが、それが交流の中で豊かなものになっていくかもしれない。それぞれ市民が学校の先生をしたり、企業に勤めていたり、図書館や役場に勤めていたりする場を離れて、ここで交流ができるという場所でもあると思う。それはきちんと未来に評価をされていく、このようなことがあって良かったというものもあれば、もう少しこうしたほうが良かったということもある。皆さんのご意見を聞いて、どれも非常に大切な視点であったと思う。具体的に、平成30年度に何をするかということをお話できればと思う。(委員長)

- 貴重な意見をありがとうございました。やはり理想という部分が大きくなるので、先ほど委員長からあったように、どう具体化するか、現実にするかというようなところでのご助言をこれからも頂ければと思う。(事務局)

① 複合施設建設に伴うアウトリーチ事業

- ・アウトリーチ事業の実施計画について事務局から以下の説明があった。
 - ・平成29年度複合施設建設に伴うアウトリーチ事業、実施計画書をご覧ください。
- (資料③) 先ほどもお話に上ったように、一昨日の校長会でご案内させて頂いた。委員の皆様からのご意見にもあったように、周知活動がまだまだできていない。平成31年の8月開館ということで進めているのだが、それが市民に伝わっていないので、こちらからアウトリーチ、出前事業をして周知をしていく。その際に市民の皆さんと一緒にやって啓発をするという趣旨もある。今年度から始めて、できれば続けて開館、また通年というところで進めていきたい。昨日、希望調査の中で、来月頃から希望があった学校にはこの事業計画書のような取り組みをお願いしたいと思っている。事業内容としての5番だが、文化事業に取り組む市内の団体、グループ等との連携を図り、小中学校の希望調査をした上で、市民と一緒に啓発活動をしていきたいと考えている。今年度に関しては伊豫之二名島扶桑太鼓と、いよしわらべ合唱隊に声掛けをしたい。この団体についてはアウトリーチ事業実績のある団体で、すでに3校訪問している。ありがたいことに教育委員会からというようなことではなく、この施設の開館に際してこの団体が自主的にPR活動を進めてくれている。教育委員会としても一緒にさせてもらえないかというようなところで進めていきたい。その実績のある団体については、私たちが文化展開活動をしているというところも踏まえて、施設でどのようなことをしたいか、また、ふる

さを見つめ直して、どのようなことをしたいかというようなところについても、子どもたちと対話をする形で進めていきたいと考えている。このアウトリーチに関しては、先ほど各委員がご助言下さったように、保護者を含めできるだけ多くの方に周知をするというところを踏まえて今年度から進めていきたいと思っているので、また学校等においてお願いできたらと思う。(事務局)

② 伊予市の魅力・保存継承「ボランティア育成講座」

- ・ 伊予市の魅力、保存継承、ボランティア育成講座について、事務局から以下の説明があった。
- ・ 事業の目的としては、伊予市らしさというところにつながるのだが、伊予市の魅力を伝え、学ぶことにより、郷土愛を育み、地域のために貢献したいと考える子どもに対して、参画の機会、出番や居場所を与える、また、人材発掘、育成および、リーダー育成も図るということを考えている。これに関して調査については今年度から早速取り組みはじめ、本格的な実施時期は来年度からと思っている。手法については、郷土愛を育むには地域の取り組みに参画することが一番なのではないかという考えから、各学校や地域と協力・連携して、子どもたちに地域での参画の機会、出番や居場所を創出したいと考えている。また、時代の流れにおいて実施困難となってしまった行事や技術もある。今の当たり前が今後なくなってしまうということもあるため各委員からご意見があった通り、記録をしていかなければいけないと重々考えている。現段階において可能な限り IT 技術等を駆使しながら記録をし、それを発信・活用していきたい。その手順は、調査・啓発・参画ということで、まず市内地域行事の調査を行って、各地区や、市内イベント行事について、どのようなものがあったかということを調べる。そうした上で出来れば学校を通して、子どもたちに地域にはこのような行事がある、このような人たちがいるということを知らせ、地域の行事に参加したらどうかというようなことを、保護者も含め周知・啓発を図っていききたいと思う。また次の段階として、参画がある。各行事において、地域の人たちにも子どもたちの受け皿をつくってもらいたいということ。理解、協力を仰いで、子どもたちの参画の場をつくってほしい、また子どもたちがただ単に参加するだけではなく、役割を持たせるようにしたい。例えば得意分野・興味を持つような活動、動画を撮ったり写真を撮ったりしながら、伊予市の魅力、文化、地域資源を広く情報発信してもらおう。そのための正しいルールを学んだり、IT の使い方について学ぶ講座を実施したい。その際に、講師の方については可能な限り写真店やビデオ講座をしている方をお願いして研修をして頂こうと思っている。次にボランティア育成講座は、対象を市内の小中学校、高等学校生とし、あくまで任意の参加としたいと思う。学校から何人出して下さい、というようなことは負担になってしまう。できれば県内大学等の協力も仰ぎたい。開催時期や場所については、放課後や休みなどを検討している。また、中山、双海においても出前講座と

して出向いて行って、可能であれば学校の教室、図書館、公民館、地域事務所等に出向いて行って教える場ができたと思う。講座については、6 回程度の内容を考えている。YouTube や動画に興味を持つ子が多いと思うので、そのような部分を取り入れながら映像記録、編集や写真撮影、またインターネットを使った情報活用など、発信を行う方法を学ぶ場になるかと思う。効果や習得後の展開、継続については、1 人でも多くの子どもが参加し地域に触れることによって郷土愛の向上を図るということに視点を置きたい。また、地域の人たちも子どもたちの関わりによって新しい交流が生まれ、子どもたちへの支援やつながりになれば良いと思う。技術の習得後に関してもやったきりにするのではなく、教育活動に関して協力をお願いするとともに、ことあるごとに自分から IT を駆使して情報発信をしてもらいたい。情報発信だけではなくワークショップなどをして、集めた地域資源をもとに自主企画を展開するような研修ができたと思う。例えば宝探しなどの企画も、そのような展開につながればと思っている。また、その継続性については、先ほど委員 2 のお話にもあったが、自分がしたことがどう成果につながっているかという部分が見える仕組みや、人の役に立つようなスキルということ、可能な範囲で支援できるような体制を考えていきたい。人の役に立つということが、やる気の原動力だと思う。またせっかく関わった子どもたちにこれからもつながりを持ち続けてもらいたいと思っている。文化と IT という部分でつなげながら、このような取り組みをしていきたい。まず 30 年度にこのようなことをしていきたいと思うが、またご意見を頂けたらと思う。(事務局)

- 先ほど説明してもらった資料②の最後に別添している「伊予市らしさ再発見事業平成 30 年度」というものとリンクしているという考えで良いか？(委員長)
- ありがとうございます。30 年度については先述の内容を中心に行っていきたいと思っている。また 30 年度から 31 年度にかけてアウトリーチ事業をしていきたいと思っている。一つ懸念をしているのが、31 年度 8 月に開館ではあるが、実際に 31 年度 8 月に建物ができて、その後、既存の図書館を壊して駐車場にする。そのため 8 月から 3 月までは駐車場がない時期がある。そうした場合、何かしら大きな事業をしようとしても駐車場がないので来場出来ないという事態もあるので、事務局としてはその期間を習熟期間、および市民のお試し利用期間にしてもらえたらと考えている。舞台技術研修や施設スタッフ研修、ワークショップ講座、また企画運営講座というような企画をして、施設の機器の使い方や、施設の運営活用方法についての学びの場というものを中心に講座を展開したい。もう 1 点は、文化ホールを市民に使ってもらって、駐車場がない中ではあるが、身内の方等に事情を知った上で来場頂き、お試し利用としての事業を実施し、このような使い方ができる、開館したときにはこのようなことをしてみようというようなイメージを展開したいと考えている。(事務局)
- 今日の課題は、そのような流れの中で、平成 30 年度、事務局から提案をもらった二つの事業である。一つ目は補助金を取らずに行うというものが資料③の取り組みである

「平成 29 年度複合施設建設に伴うアウトリーチ事業」、校長会のほうで昨日お話があったもの。これは副委員長から出てきた周知と、施設の中で行われる楽しいこともたくさん知ってもらおうということを目的としている。二つ目、資料④のボランティア育成講座のほうは、できれば補助金を取りたいという認識で良いか。(委員長)

- その通りである。補助金の種類にもよると思うが、講師の都合・使用料の関連があるので、補助金を活用する中で行いたいと思う。その補助金が難しいようであれば、まずは地域行事の調査などに関して、進めていきたい。(事務局)
- この補助金施設に関する事情があり、この時期に委員会をしている。ただし今のお話では、補助金が取れなくても何らかの形で初めの一步は踏み出すということである。倍率が 2 倍、3 倍の補助金を取りにいくので、事業を計画します、補助金を取ったらこの程度できます、取れなかったらこれだけは絶対しますというような提案が、特に文化ホール部分に関しては増えてくる。(委員長)
- 平成 29 年度のアウトリーチ事業についてだが、全体的に今までしていることの中に乗せていくということで、子どもたちへの周知が基本なのではないかと思う。その過程の中で、できるだけ市民団体の参加ができていくと良い。文化事業に取り組む市内の団体、グループ等の参加をこれから増やしていくとは思いますが、きちんと声を掛けて、また参加してもらえるような人たちを増やしていくという形の連携協力体制を取ったら良いのではないかと思う。この実施計画書は、先ほどの委員 2 の話にもつながるが、最終的にやはりどのように実施されて、どう楽しかったかというようなことを、ホームページなどで発信していく方が良い。恐らく計画はしているのだと思うが、実施計画書の中にそこまで書いたほうが良いのではないか。もう一つのボランティア育成講座については子どもたちが中心になっているので、この準備の段階でもう少し市民の方に参加してもらうことを考えたほうが良いのではないか。難しいかもしれないが、調査、啓発、参画という流れの中で、調査の部分というのが恐らくそれぞれの地域での活動になると思う。そのため、うまく地元の方々を巻き込んでいくということと、最終的に調査して発信をしていくのに子どもたちが参加する、そこに IT を使うというのはすごく良い発想だと思う。動画の再生回数などの数値化もできるところもすごく良いと思うので、それが新しい施設の中にもきちんと反映されるというところまで見えるような形が、やはり要るのではないか。(副委員長)
- 副委員長のご意見について、そのとおりだと思う。アウトリーチに関しては、まず取り組める団体がいよしわらべ合唱隊と扶桑太鼓のメンバーになるが、なぜあの人たちばかりしているのかと言われる状況は良くない。できるだけ多くの方がもっと違った形で参加いただきたい。読み聞かせの会、別の紙芝居をしている団体でも良いのだが、その人たちが私たちも参加したいというときの窓口をきちんと作っていくことが大切だ。最初は文化協会中心になるが、文化協会に関わっていない人たちも手を挙げられるような、一緒に事業をしませんかと声をかけて手を挙げられるような仕掛けをつく

ると良いと思っている。最初の基本計画のときに、100 人以上の市民を集めて行った会議があった。そのときに子どもたちにいろいろな夢を語ってもらって、できなかったらどうするのかという話がある。そのときから出ていたのだが、少しずつでも実現へ持っていけるような取り組みにしたいと思っている。そしてやはりアーカイブがきちんとしていて、それが継続するということと、新しい施設に反映されるということだと思う。撮りためた映像が新しい施設でも流れるというようなことが必要なのではないか。その一方で、地域の資源、特に伝統芸能やお祭りなどは、ルーツをきちんと探るということも同時にしなくてはいけない。まず事務局の発想は、子どもたちがそこに触れ合っ、楽しいことがあるという中で徐々に分かれば良いということだと思う。少なくとも大人たちや、地域の市民にとってみれば、やはりそのルーツはきちんと語れるようにするべきだし、調査をしながらということだろう。(委員長)

- 私も話を聞いていて、アウトリーチ事業の成功のイメージがどこにあるのかということが大事だと思う。このアウトリーチ事業を受けた人たちが、そこを自分たちでも使いたいと思えるようになるかどうか基本なのではないか。例えば太鼓の演奏会や合唱隊のパフォーマンスを聞くだけでは施設を使いたいと思わない。この複合施設があることによってそのような活動が新しく起きる、もっと発展する、自分たちがしたいことができるというようなことが伝わらないといけないと思う。複合施設の PR と書いてあるが、本当は使う立場の人たちが自分たちはこのようなことで助かったというようなことが言えたら良いと思う。まだ施設は完成していないのだが、このような拠点があることによって、自分たちの活動に後継者が生まれる、より発展していく、そのようなことを当事者が語ることが大事だと思う。自分たちもそこを使って何かしたいことができたらいという話をしてほしい。子どもたちだけではなく、学校にそのような活動をしている人たちが集まって、一緒に聞けたらさらに良いと思う。(委員 2)
- 扶桑太鼓のリーダーは全国のホールを知っている。あの施設が良かった、あの施設のスタッフは良かったという話をするので、そのような話をアウトリーチ事業の中でしてもらおうと良いかもしれない。(委員長)
- そう思う。話しにくかったら対話で引き出すようにすると、伝えたいことが伝わるのではないと思う。アウトリーチ事業を受けて分かれということではなく、そこはきちんと丁寧に伝えたほうが良い。それから、ボランティア育成講座について、ここに伊予市の魅力を伝えると書いてあるのだが、魅力とは何なのか。言い方はこれで良いと思うのだが、私は地域行事などの地域の中での価値や、社会的な価値を伝えるということではないかと思う。それが自分たちにとって必要なものだということを伝えないといけないのではないか。伊予市の魅力を「学ばせる」というと、少し上から目線ではないかという感じがする。子どもたちが自主的にということになると、また成功のイメージなのだが、成功のイメージが参加の機会や出番や居場所を与えることなのか、そのようなことに関わる人たちが増えていくことが良いのかという目標の持ち方によ

って、事業の中身の組み立てが変わってくるのではないかな。私自身は、伊予市の魅力を学ぶことによって、あるいは学ぶとともに参画の機会、出番や居場所を共創するという言い方のほうが良いと思う。共に創ることによって郷土愛を育み、地域のために貢献したいと考える子どもたちが増えることがこの事業の目的ではないかと思っている。その中から新しいリーダー育成を図っていくという話だ。そこの目的をどこに置くのかによって、書き方が変わってくるのではないだろうか。資料に書いてあることを見ると、皆で共創していく、学んでいくなど書いてあるので、目的を少しそのような言い方に変えたほうが良いのではないかなと思う。そこで育てていく人材が、保存継承の担い手としての人材を育成するという話と、そのような活動を応援する人材を育てていくという2種類あると思う。当面は保存継承の担い手育成でも良いと思うが、そのような活動をしている人たちを応援するための人材を育てていくという2つの話がある。まずボランティアありきではなく、いろいろなことに気が付いてボランティアに参加したいという人たちが増えていく取り組み、姿勢、そのようなものが見えると良いと思った。(委員2)

- とても大切な視点だと思う。ボランティア育成講座というのは補助金を検討する中で決めている名称かもしれないが、ここをうまく使い分けたい。タイトルがいわゆるボランティア育成といわれるとそれでイメージが決まってしまうということもあるので、うまく検討することが必要だ。子どもたちと共に学んで共に成長するという視点がやはり大切だと思う。伝統芸能の担い手をつくる、地域行事の担い手をつくるということもとても大切である。担い手には2種類あって、直接それを担う人と、裏方である。文化ホールおよび図書案の2番目の役割は、いわゆる中間支援である。将来的に施設のお客さんではなく、運営で参加したいという人も増えていくようにしたい。子どもたちを二つに分けることはあり得ないので、最初は窓口を一つにして関心を持ってもらいながら、その中で大人になるにしたがって、私は現場には立たされないけれども、応援はしようと思う人たちが増えてくると考えたかどうかと思う。(委員長)
- もう一つは、補助金・助成金については例えば地域活性化センターは地域づくり系の助成金も該当すると思うので視野に入れると、もう少し幅が広がるのではないかな。(委員2)
- 地域活性化センターも視野に入れながら、どの補助金に割り振るかは、これから事務局が検討しないといけない部分だ。(委員長)
- この二つのアウトリーチ事業とボランティア育成講座の説明をいろいろ聞いていて、非常に大変だと思った。委員2が言ったように、最終的な成功のイメージが持てることが本当に大事だと思った。またボランティア育成講座のときに私も思っていたのだが、子どもたちがこうしたら楽しそうだということからの取り掛かりで良いと思うが、一般の市民の方も対象になると良いと思う。大方の市民は日々の暮らしが大変で、なかなか地域のことまで手が回らないので、地域での伝統継承なども薄れていっている

のではないかと思います。なぜ伝統芸能が大事なのか、そのルーツを知ることで関心を持つ方もいるのではないかと思います。ルーツを探り発信していくということも非常に大事なので、講座に盛り込めれば良いと思う。(委員1)

- そう思う。そこは共通している。(委員長)
- 記録していったアーカイブとして残していくということだと思うのだが、まだ施設もできていないので、まずは SNS からの発信かと思う。(委員1)
- まずは SNS からスタートして、施設ができる頃にはアーカイブが増え、皆が関心を持っていてというイメージになる。3 年程度段階を踏むことになると思う。(委員長)
- 地域行事のまとめにあたっては、ある程度地区の代表者にお願いすれば集まると思う。以前も市でそのような取り組みをしたが、文章だけで、映像や写真などはなかなかない。そのようなものもゲーム性を持たせて興味を誘い、集めていきたい。また学んだ子どもたちが逆に大人に教えていく機会もできると思うので、そのような企画も行っていきたい。(事務局)
- ボランティア育成講座については、もう少し具体的なイメージを持って学校での説明もしたいという気持ちがある。この文章からは大まかなものは分かるが、子どもたちが実際に関わっていったときに、その関わり方や学校の役目など、いろいろな問題点が出てくると思う。そのため、またこれらについては校長会等の会合の際、もう少し丁寧な説明と、こちらのほうが思ういろいろな課題の調整をしっかりと煮詰めて実施してもらえたらありがたい。(委員5)。
- とても大切なことである。このような事業で市民や子どもたちと一緒にやる場合、オペレーションマニュアルというものを作る。現場で起こりそうな様々のトラブルにどう対応して、誰が責任を取るのかということを決めておく必要がある。事務局が考えていることと学校側の思いはやはり違うので、そこはより良く詰めていかないと、一度実施してももう二度とできなくなってしまう。そこを十分に詰める必要がある。具体的に何をやるのか、どこへ行くのか、何時間が限度なのか、そのようなことも含めて協議していかななくてはならない。(委員長)
- 別の伊予市の会議に参加をしたときに、20 歳以上の方のアンケートだったと思うが、地域の人との関係性が希薄になってきていると感じている人が増えてきている。しかも、その状況がどちらかというと好ましく思っている方が多かった。昔のような地域密着型というものよりも、今が良いと思っている若い世代が多いように思った。子どもたちというのは学校の中でいろいろな行事に参画をしていて、地域のお祭りなどによく行っているのは感じる。その子どもたちがこのような講座をすることによって、して良かったと思ってもらいたい。子どもたちも満足することができ、大人にもそれが伝わりというような、良いスパイラルができていくことが望ましいことではないかと思う。ボランティアの養成のみを目指しているわけではなくて、やはり地域のつながりがあり、それが伊予市の魅力にもつながっていくのではないかと感じた。(委員4)

- 昔ながらの地域の古いつながりのようなものが薄くなっていることは良いことだと私も実は思う。ただし上下関係があったり、強制があったりするような関係は失われている一方で新しい人と人とのつながりをつくれているかということ、なかなかそうはいかない。この施設を中心にする事で、新たなつながりができてくると良いという話だと思う。とても大切なことだ。その一つのきっかけが地域行事ではないかと思う。茅野市民館ではふるさと祭りという事業を何年間か国の補助金をもらって行った。当時の補助金になるのは地域伝統文化活性化事業というものだったのだが、各地域ばらばらに行っている獅子舞の獅子頭を一堂に集めるという取り組みを行った。茅野では谷ごとに集落があるのだが、昔は谷同士にあまり交流がなかった。一堂に会すると何が起きたかということ、隣の何とかという所の獅子頭はうちのと違っていたというようなことになり、2週間程度の間に驚くほど人が来た。私たちも発見があって、獅子頭には雄と雌がいるということが分かり、うちは雄だったという話になり、こちらはそれを勉強し、たかが獅子頭が並んでいるだけなのに、勝手に交流が始まるという状況が生まれた。地域同士でつながるということを、委員4のお話を聞いていて思った。非常に重要な視点だと思う。事務局の思いは子どもたちということだと思うのだが、それで地域も変わるかもしれない。関わる人が新たに増えるかもしれない。なかなか難しいが、他地域から他地域の地域行事に関わる人も出てくるかもしれない。ピンチヒッターを頼むなどということが、実際に交流すると起きるかもしれない。(委員長)
- 私も最初にボランティアの育成講座は、これからのことを思うと入りやすいのではないかという思いがある。ただ実際に実施していくとなると、かなり厳しいものがあると思う。先ほど委員2が言ったように、主体は子どもたちということになると、市と小中高と若い青年団なども含めて、誰がどのようにアプローチしていくのかという共通意識を持つのが一番厳しいと思う。そのためには、やはり現在地域に出番を待っている方がいると思うので、リーダーにいかに関わり協力してもらうかということが、大事になってくるのではないかと。将来のことを考え保存継承を真剣に捉えている地元の市民に、いかにこれを訴えていくかというのが大事だと思う。伊予市に定住している市民が地元の良さにどのように気付いているかということが、今後の参考になるのではないかと感じている。翠小学校が校区とする地域で、先進事例として非常に良い資源もあるのではないかと思う。その辺りの見本、事例として今後発信ができる良い素材が残っているように思う。いずれにしても主体的に取り組む方々を、今後各地域それぞれに発掘していくことが大変大事だと感じる。(委員3)
- ありがとうございます。実際に誰がリーダーになるか、言うのは簡単だが、一番大変なことだと思う。(委員長)
- 郡中200年祭のときに、クイズラリーを企画して子どもたちに作成してもらったのだが、上は高校生から下は小学生までの異年齢のメンバーが集まって企画を立て、実践してもらった。伊予農業高校の生徒にリーダーになってもらい、下の中学生や小学生

の子どもたちの面倒を見てもらう形になったのだが、異年齢のつながりはとても大事だと思う。そのときに地域おこし協力隊に来ていたメンバーが生徒たちの動きだけで自分は何もしなかったというようなことを言っていた。やはりそれぞれの役割を自分で感じて、何かしてくれるようなやり方が生まれてくるのだと思う。その力が大きな達成感になっていて、後で感想を聞いてみると、小学生から高校生まで皆良かったと話してくれた。そのような場があって、人が集うということができればすごく良いと思う。そのときにも、たくさんの人が感動するかということそうでもなく、やはり実際に関わった人たちが一番恩恵を受けるという形になり、郡中の200年祭で言うと本当に20人程度のメンバーだった。しかしそこはボリュームを求める話ではないかもしれない。100人が100人満足するというのはなかなか難しい。そうすると学校現場を離れたときに少し選ばれたというか、自らが選んだというか、そのような人たちが感動を覚えていく、それを伝えていくというようなことができれば良いと思う。例えばこのボランティア育成講座の目標を、地域のために貢献したいと考える子どもたちが増えることだといったときに、何人増えたらいいのかという話が分かりやすい目標としてあるのだろうと思う。他市の事例を見ると、無理やりでも20人にします、今10人なので15人にしますなどという目標をつくったりしている。そのような目標が見えてくると良いのではないかなと思う。幅広くというのは大事なのだが、人材育成は絞らないと厳しいこともある。なかなか兼ね合いが難しいと思うが、それを意識した運営ができれば良いと思う。(委員2)

→ 広く声掛けはして、来てくれるメンバーが例えば20〜30人、後々熱心に続ける人がまた1割になるかもしれない。ただその2人、3人熱心にする人が出てくると、皆がそれに影響され、きちんと効果がある。それは各文化施設やNPOでよくいわれることだ。2人だとなかなか厳しいが、3人いると誰かがしんどくなっても誰かがフォローするのでできるようになっていく。そこから始めて、徐々にやりたいという人たちが出てくる。文化施設とある学校とが連携をしていると、うちもしたいという話が出ているという経験は私にもあった。子どもたちないし地域の市民でも同じかと思う。それが委員2のお話にもあった、一つの成功のイメージ、具体的なモデルケースということだと思う。(委員長)

→ まずそこを目指していくということだと思う。(委員2)

→ 高い目標は持っていて良いのだが、まずどこをするかということだと思う。皆さん、ありがとうございました。今各委員から頂いた意見をできるだけ反映したいと思う。お願いがあるのは、先ほども申し上げたが、どの補助金がどれに合致をするか、この文言で狙う補助金が取れるか取れないこともある。実際に事業を実施する際と、書類上出てくるものは多少違うということがあるかと思う。それからもう一つは、場合によってはこれを分割する、ないしはある部分とある部分を一緒にして事業化することがあり得るということをおまえて頂き、現場の判断でお願いしたいと思う。大

変有意義な議論ができ、ご意見もいただいた。一つ目のことに対してはもうすぐスタートすると思うが、もう一つのよりややこしく、より志高い部分に関しても、何とか来年度にスタートを切れればと思う。頭で考えている内容は現場に行くとおそらく違ってくるので、そこを考えながら進めていければと思う。(委員長)

→ ありがとうございました。本当に貴重な意見で、参考になった。(事務局)

③ その他

- ・ 次回のアドバイザー会議の日程について事務局より以下の連絡があった。
- ・ 10月の3週、4週辺りで調整をしながら、また第3回のアドバイザー会議を開催できればと思っている。詳細日程については事務局より後日ご連絡させていただく。(事務局)

5. 閉会

- ・ 閉会の言葉

以上